

I did not take ❶ the temporary editorship of an agricultural paper without misgivings. Neither would ❷ a landsman ❸ take command of a ship without misgivings. But ❹ I was in circumstances that made the salary ❺ an object. The regular editor ❻ of the paper was ❼ going off for a holiday, and I accepted ❽ the terms he offered, and took his place.

The sensation of being at work again was ❾ luxurious, and I ❿ wrought all the week with ⓫ unflagging pleasure. We ⓬ went to press, and I waited a day with some ⓭ solicitude to see whether 10 my effort was going to ⓮ attract any notice. ⓯ As I left the office, toward sundown, a group of men and boys at the foot of the stairs ⓰ dispersed with one impulse, and ⓱ gave me passage-way, and I heard one or two of them say: "That's him!" I was naturally pleased by this incident. The next morning I found a 15 similar group at the foot of the stairs, and ⓴ scattering couples and

農業新聞の編集長の職を一時的に引き受けるにあたって、私としてもためらいはしたのである。船乗りでもない人間が、船の指揮を引き受けるとなれば、やはりためらうことだろう。だが私は、給料というものを考慮せざるをえない立場にあった。いつもの編集長が休暇に出かけることになったため、私は提示された条件を受け入れ、彼の座を引き継いだ。

久しぶりに仕事をするのは何ともいい気分であり、一週間ずっと、楽しさは一時も揺るがなかった。そしていよいよ原稿を印刷所に回すと、一日のあいだ、己の努力が人目を惹くだろうかと、いささか不安な思いで待った。夕暮れ近くに新聞社を出ると、階段の下に集まっていた男たち——中には子供も交っている——の団がさっと散らばって私を通してくれた。一人か二人が「あいつだ！」と言うのが聞こえた。当然ながら、私は気をよくした。翌朝出勤すると、やはり同じような団が階段の下に集まっていた、通りや向

- ❶ I did not take ... without misgivings: 私は不安なしには～を引き受けなかった＝引き受けはしたが不安はあった
- ❷ the temporary editorship: 一時的な編集長・編集主幹の地位。「編集長」を和英辞典などで見ると the chief editor, the editor-in-chief としていることが多いが、実際は単に the editor ということが多い。John Freeman was the editor of the literary magazine Granta until 2013. (ジョン・フリーマンは 2013 年まで文芸誌『グランタ』編集長を務めた)
- ❸ a landsman: 陸上生活者、陸の人
- ❹ take command of ...: ～の指揮を執る
- ❺ I was in circumstances that ...: ～する状況にあった
- ❻ an object: 目的、動機
- ❼ go(ing) off for ...: ～に出かける
- ❽ the terms he offered: 相手が示した条件
- ❾ luxurious: 贅沢な
- ❿ wrought: work の過去形。一世紀半前に書かれたにもかかわらずマーク・トウェ

インの英語は驚くほど古びていないが、さすがに単語レベルでは、このようにいまでは使われないものがいくつかある。

- ⓫ unflagging: 衰えない、弱らない。flag: 萎える、薄れる
- ⓬ went to press <go to press: 印刷に回す。cf. printing press: 印刷機
- ⓭ solicitude: 心配、気をもむこと
- ⓮ attract (any) notice: 注目を集める
- ⓯ As I left the office, toward sundown: 超基本的なことだが一度だけ触れておく: as の基本的な意味のひとつとして、「～するとき」がある。ここのように、時間を示す語句 (toward sundown = 日没近くに) があればたいていはこの意である。as が「～ので」という because, since の意味で使われることは意外に少ない。
- ⓰ dispersed with one impulse: 直訳は「ひとつの衝動とともに散らばった」。
- ⓱ gave me a passage-way: 現代英語なら let me pass あたりか。
- ⓴ scattering: 分散している、ちりぢりの

never, never believed it before, ❶notwithstanding my friends kept me ❷under watch so strict, but now I believe I *am* crazy; and with that I ❸fetch(ed) ❹a howl that you might have heard two miles, and ❺started out to kill somebody — because, you know, I knew it ❻would ❼come to that sooner or later, and so I ❽might as well begin. I read ❾one of them paragraphs over again, so as to be certain, and then I burned my house down and ❿started. I have ⓫crippled several people, and have ⓬got one fellow up a tree, ⓭where I can get him if I want him. But I thought I would ⓮call in here as I 10 ⓯passed along, and make the thing perfectly certain; and now it is certain, and ⓰I tell you it is lucky for ⓱the chap that is in the tree. I should have killed him, sure, ⓲as I went back. Good-by, sir, good-by — you ⓳have taken a great load off my mind. My ⓴reason has

思ったのさ、いままでは仲間たちに四六時中厳しく見張られてもまさかと思ってたけど、俺はほんとに狂ってるんだ、そう思ったのさ。そうして俺は、二マイル先からも聞こえそうな悲鳴を上げて、誰かを殺しに表に飛び出した。どうせいずれそうするとわかってるんだから、さっさとはじめようと思ったんだ。そして俺は、念のためもう一度、一段落だけ読み直してから、家に火を点けて、出かけた。何人かの人間を半殺しにしたし、一人はいまも木の上ののぼったままで、その気になればいつでも捕まえられる。だけどせっかくだからここに寄って行って、絶対迷いがなくなるまで確かめようと思ったわけさ。そしてもう迷いはない。あの男、木にのぼってるのは幸運だよ。帰り道に会ったら、絶対殺しただろうからさ。ごきげんよう、ごきんげんよう。あんたのおかげで、すっかり気が楽になったよ。あんたが農業のことを書いて

- ❶ notwithstanding my friends kept me ...: このように notwithstanding を though の意味で使う（つまり、そのあとに節（主語と述語）が来る）のは現在では標準的でない。
- ❷ under watch: 監視されて
- ❸ fetch(ed): （叫び、うめき声などを）出す
- ❹ a howl that you might have heard two miles: ニマイル離れたところでも聞こえたかもしれない叫び声。howl は音も意味も日本語の「吠える」に似ている。two miles は正しくは two miles away か。The explosion could be heard two miles away. （その爆発音は 2 マイル離れたところでも聞こえた）
- ❺ started out to kill ...: started to kill ... とそれほど変わらないが、「乗り出した」「取りかかった」という感じが強まる。シンプルな動詞（start）に副詞（out）が付いたいわゆる句動詞（phrasal verb）が豊かなのはマーク・トウェイン英語の大きな特徴。
- ❻ come to that sooner or later: 遅かれ早かれそこに至る。that は誰彼構わず殺しはじめるということ。
- ❼ might as well ...: ～するのも悪くはない。べつにそれが理想的な選択肢というわけではないが、まあどうせならやってもいいんじゃないか、という響き。

- ❽ one of them paragraphs: このように them を those の意味に使うのは非標準的。He don't want them books.（あいつはそんな本なんか見向きもしない）
- ❾ started: ここは「出発した」。
- ⓫ cripple(d): ～を不具にする
- ⓬ got one fellow up a tree: 一人を木の上に上げた（追いやった）。これもマーク・トウェインらしい phrasal verb の更なる例。
- ⓭ where I can get him if I want him: 奴を捕まえたかったらそこへ（木の上へ）行けば捕まえられる
- ⓮ call in: 立ち寄る
- ⓯ pass(ed) along: 通りすぎる
- ⓰ I tell you: （挿入的に用いて）いやほんとに。訳す上では、語尾を工夫する程度で十分なことも多い。
- ⓱ the chap: 奴
- ⓲ as I went back: 帰り道に
- ⓳ have taken a great load off my mind: 私の心から大きな荷を降ろしてくれた＝おかげですごくほっとした
- ⓴ reason: 理性

“Oh, he’s <sup>①</sup>a thinker,” Al said. They <sup>②</sup>went on eating.

“What’s the bright boy’s name <sup>③</sup>down the counter?” Al asked Max.

“Hey, bright boy,” Max said to Nick. “<sup>④</sup>You go around on the  
5 other side of the counter with your boy friend.”

“<sup>⑤</sup>What’s the idea?” Nick asked.

“There isn’t any idea.”

“You better go around, bright boy,” Al said. <sup>⑥</sup>Nick went  
around behind the counter.

10 “What’s the idea?” George asked.

“<sup>⑦</sup>None of your damn business,” Al said. “<sup>⑧</sup>Who’s out in the  
kitchen?”

“<sup>⑨</sup>The nigger.”

“What do you mean the nigger?”

15 “The nigger that cooks.”

“Tell him to come in.”

「賢いんだよ、こいつは」アルが言った。二人は食べつづけた。

「あっちの頭いい奴、名前なんてんだ？」アルがマックスに訊いた。

「よう、頭いいの」マックスがニックに言った。「お前、カウンターの中に入っ  
てそこのボーイフレンドと一緒にになりな」

「どういうことです？」ニックは訊いた。

「どうもこうもねえよ」

「さっさと入れ、頭いいの」アルが言った。ニックはカウンターの中に入った。

「どういうことです？」ジョージが訊いた。

「お前の知ったこっちゃねえ」アルが言った。「キッチンに誰がいる？」

「黒人が一人」

「どういうことだ、黒人って？」

「黒人の料理人です」

「こっちへ来いって言え」

① a thinker: 思想家、ものを考える人

② went on eating <go on ...ing: ～し続ける

③ down the counter: カウンターを「下って」といっても高低があるわけではない。なんとなく中心から、人の関心が向いているところから離れているという響き。The bathroom is down the hall. (洗面所は廊下を(ずっと)行った所にある。『コンパスローズ英和辞典』)

④ You go around ...: 命令するときにyouが付くのは珍しくない。特に、何人ががいて「お前は～しろ、で、お前は～」というふうに命令を分ける場合はなおさら。

⑤ What’s the idea?: このあとに with ... が続けば純粋に目的、用途を問う場合もあるが (What’s the idea with “double masking”? (「二重マスク」って何が狙いなわけ?)), What’s the idea? だけだとほとんどの場合、「どういふつもりだ」「何言ってるんだ」といった批判・非難になる。

⑥ Nick went around behind the counter: 反復を避けようと思えば Nick did

as he was told というふうにくらでも言い方はあるのにそうはせず、あるいはここでのニックの心理状態を説明したりもせず、いままで使われた言葉をほとんど機械的に反復するところがいかにもヘミングウェイ的。

⑦ None of your (damn) business: 余計なお世話だ

⑧ Who’s out in the kitchen?: 厨房が文字どおり「戸外」にあるわけではもちろんなく、l. 1 の down the counter と同様に、ここが中心であって厨房は「外れて」いるという感覚。カウンターのこっちとあっちでは区切りがないので up/down という分け方がなじむが、いま彼らがいる食べるスペースと厨房とのあいだには区切り・仕切りがあるから in/out という分け方がなじむ。

⑨ The nigger: 黒人を指す言葉として当時は普通に使われたが、いまではまず(黒人以外によっては)使えない語であり、the N-Word と呼ばれたりもする。Adventures of Huckleberry Finn (1884/5) にこの語が219回出てくるという理由で、今日図書館で禁書扱いになったりもする。

<sup>①</sup>In 1951 you couldn't get us to talk politics. <sup>②</sup>Ballplayers then <sup>③</sup>would just as soon talk <sup>④</sup>bed-wetting as talk politics. Tweener Jordan <sup>⑤</sup>brought up <sup>⑥</sup>the H-bomb one seventh inning, sitting there <sup>⑦</sup>tarring up his useless <sup>⑧</sup>Louisville Slugger at the end  
<sup>5</sup> of a <sup>⑨</sup>Bataan Death March of a road trip when it was <sup>⑩</sup>one hundred and four on the field and about nine of us <sup>⑪</sup>in a row <sup>⑫</sup>had just been tied in knots by <sup>⑬</sup>Maglie and it looked like we weren't going to <sup>⑭</sup>get anyone on base in the next five weeks except for t<sup>⑮</sup>hose hit by pitches, <sup>⑯</sup>at which point <sup>⑰</sup>someone down the end of the bench  
<sup>10</sup> told Tweener to <sup>⑱</sup>put a lid on it, and he did, and that was the end

1951年に俺たちに政治の話をさせようとしても無駄だったね。あのころの野球選手ってのは、政治の話なんかするくらいならおねしょの話をした方がまだマシっていうくらいだった。ある日の7回のこと、トウィーナー・ジョーダンが役にも立たないルイヴィル・スラッガーに松ヤニ塗りながら水爆のおっぱじめたことがあったけど、何しろその時はバターの死の行進もかくやっていうキツイ遠征の終わり近くだったし、グラウンドの温度はきっかり40度、チームは9人ばかり続けてマグリーにキリキリ舞いさせられてこれじゃあ今後5週間デッドボール以外誰も塁に出られそうになかった。で、誰かがベンチの端からトウィーナーに、おい黙んな、と言ったらトウィーナーの奴もあっさり黙って、フィラデルフィア・フィリーズとしては

① In 1951 you couldn't get us to talk politics: この作品に登場するキューバの二人の重要人物との関連で言えば、バティスタは前年の1950年に逃亡先のアメリカから戻ってきて政界に復帰したところ。クーデターを起こして独裁者となるのは翌1952年。カストロは大学を卒業後1950年に弁護士となり、目下政治犯や貧しい人々のために尽力中。get us to talk politics は「俺たちに政治の話をさせる」。「～の話をする」は talk about ... が普通だが、business, politics など特定の語に関してはこのように talk ... という形をとる。

② Ballplayer(s): (プロの) 野球選手

③ would just as soon ... as ~: ~するくらいならいっそ……する

④ bed-wetting: 寝小便

⑤ brought up <bring up: (話題を) 持ち出す

⑥ the H-bomb: 水爆。the hydrogen bomb の略。当時は冷戦の只中であり、アメリカ人にとって共産圏が持つ水爆は大きな脅威だった。

⑦ tar(ring) up ...: ~に松ヤニ (pine tar) を塗る

⑧ Louisville Slugger: 大リーグでよく使われるバットの銘柄。もとケンタッキー州ルイヴィルで作られた。

⑨ a Bataan Death March of a road trip: Bataan Death March は、1942年日本軍がフィリピンのルソン島にあるバターン半島を制圧したのち、多くのアメリカ軍捕虜が3日間歩かされ数千人の死者を出した事件。遠征 (road trip) がバターの死の行進並みにきつかったということ。of は an angel of a girl

(天使のような少女) などと同じ比喩の用法で、名詞 A + of + 名詞 B で「A のような B」の意になる。

⑩ one hundred and four: アメリカで普通に使われる華氏 (Fahrenheit) で104度。摂氏でちょうど40℃にあたる。

⑪ in a row: 連続して

⑫ had just been tied in knots: be tied in knots で「混乱させられる」。ここでは、手も足の出ずに三振することを言っている。

⑬ Maglie: Sal Maglie (1917-92) のこと。当時ニューヨーク・ジャイアンツ (現在のサンフランシスコ・ジャイアンツ) の名投手だった。

⑭ get ... on base: ~を出塁させる

⑮ those hit by pitches: 「投球にぶつけられた奴ら」= デッドボールを食った奴ら

⑯ at which point: 「その時点で」がどの時点かということ。l. 3 のトウィーナーが水爆の話を始めたところまでさかのぼる。

⑰ someone down the end of the bench: ベンチの端っこあたりにいる誰か。down は p. 50, l. 1 の down the counter と同じ。

⑱ put a lid on it: 「話をやめる」の意の俗語。このあと p. 148, ll. 12-13 では "It put the lid on some of the celebrating ..." (それでお祭り騒ぎもいくぶん鎮まった) という形で出てくる。



of the H-bomb ❶ as far as the Philadelphia Phillies were concerned.

I was ❷ one or two frosties shy of ❸ outweighing my bat and ❹ wasn't exactly known as Mr. Heavy Hitter; in fact ❺ me and Charley Caddell, another ❻ Pinemaster ❼ from the Phabulous  
5 Phillies, were known ❽ far and wide as ❾ such banjo hitters that they called us — ❿ right to our faces, right during a game, ⓫ like confidence or bucking up a teammate was for ⓬ noolies and nosedroops — ⓭ Flatt and Scruggs. ⓮ Pick us a tune, boys, they'd  
10 ninth spots in the order to save the day. And Charley and I would

水爆に関してはそれっきりおしまいだった。

俺は下手すりゃバットよりビール一、二杯分軽いかなっていう軽量が弱点で、ミスター・ヘビーヒッターと呼ばれるにはいま一步、実のところ俺とチャーリー・キャデル、こいつもファビュラス・フィリーズの控えなんだが俺たち二人ともすごい大根<sup>バンジョー・ヒッター</sup>バッターとしてあまねく知れわたっていて、みんな俺たちに面と向かって、しかもゲームの真っ最中に、仲間を信頼するとか励ますとかなんてヒヨツ子のすることだとばかり、おいそこのフラット・アンド・スクラッグズ、なんて呼ぶんだ。チャンスに打順が8、9番に回ってきたりして俺たちの出番になると、奴らみんな、味方のチームメートがだぜ、よお、お前ら一曲弾いてくれよ、なんて言うわけで。で、チャーリーと俺はバツ

❶ as far as the Philadelphia Phillies were concerned: フィラデルフィア・フィリーズに関しては。フィリーズはフィラデルフィア市を本拠とする大リーグチームで、1950年にリーグ優勝を果たしたが、この小説の現在である翌51年からは長い低迷期に入った。

❷ one or two frosties shy: ビール1、2杯分足りない。この意味での shy はそのあとに of ... とつながることが多い。*an inch shy of being six feet* (6フィートに1インチ足りない。『リーダーズ英和辞典』)

❸ outweigh(ing): ~より重い

❹ wasn't exactly known as Mr. Heavy Hitter: 文字どおりには「ミスター強打者として知られていたわけでは必ずしもない」だが、not exactly はこういうふうに、ややふざけて「全然~でない」の意に使うことも多い。

❺ me and Charley: 折り目正しい英語なら Charley and I だがおよその語り手には似合わない。

❻ Pinemaster: 控え選手。pine はベンチの材質(松材)を指し、Pinemaster で「ベンチの主(ぬし)」という感じ。

❼ from the Phabulous Phillies: ファビュラス・フィリーズの。from は「~に属する、~の一員である」といった意味。*a friend from school [work]* (学校[職場]の友人)。Phabulous は本来 fabulous (素晴らしい) だが、Philadelphia Phillies の字面に似せて綴りももっている。

❽ far and wide: 至る所で

❾ such banjo hitters that ...: banjo hitters は(長打力のない)へなちょこ打者。打った時にバンジョーをポロンと鳴らすような迫力のない音しか出ないことから。such ... that ~は「あまりに...なので~である」。

❿ right to our faces: 面と向かって。この right も次の right during the game の right も「まさに~」という強調。

⓫ like confidence or bucking up a teammate was for ...: 信頼したり、チームメートを元気づけたりするのは~のやることだと言わんばかりに。こうした使い方の like はこの小説で何度も出てくるが(そして会話ではまったく普通に使われるが)、もう少し折り目正しい英語なら as if となるところ。

⓬ noolies and nosedroops: 造語でありどんな意味でもありうるが、rookie, newbie (新入り)あたりを連想させる。

⓭ Flatt and Scruggs: ブルーグラス史上最も有名なバンド。代表曲「フォギー・マウンテン・ブレイクダウン」は映画『俺たちに明日はない』(*Bonnie and Clyde*)でも使われたので、レスター・フラット(1914-79)によるその印象的なバンジョーは聴いたことがある人も多いはず。

⓮ Pick us a tune: 何か弾いてくれよ

⓯ when it came time for the eighth and ninth spots in the order to save the day: 八番、九番の打順(たぶんろくに打てない)が急場を救う(save the day)時がやって来ると

He was right-handed. He ❶ fussed with his cap. He ❷ had a windmill delivery. ❸ I figured, Let him have his fun, and he ❹ wound up and cut loose with a fastball behind my head.

The crowd reacted like he'd struck me out. I ❺ got out of the dirt and ❻ did the pro brush-off, taking time with all parts of my uniform. Then I ❼ stood in again, and he ❽ broke a pretty fair curve in by my knees, and ❾ down I went again.

What was I supposed to do? Take one for the team? ❿ Take one for the country? ⓫ Get a hit, and never leave the stadium alive? 10 He ⓬ came back with his fastball high, and I thought, ⓭ Enough of this, and ⓮ tomahawked it foul. We glared at each other. He came back with a change-up — ⓯ had this guy pitched somewhere for somebody? — ⓰ again way inside, and I thought, ⓱ Forget it, and took it on the hip. The umpire ⓲ waved me to first, and the crowd 15 screamed about it like we were cheating.

❶ fussed with his cap: 帽子をいじくった

❷ had a windmill delivery: (風車のように腕を一回転させる) ウィンドミル投法のしぐさをした

❸ I figured, Let him have his fun: まあ楽しくやらせてやろうじゃないか、と俺は思った

❹ wound up and cut loose with a fastball behind my head: ワインドアップして、直球を俺の頭のうしろに投げた。wound up は wind (発音記号) up の過去形。cut loose は「解き放つ」「投げつける」。fastball は日本語でいう「ストレート」。

❺ got out of the dirt: (ボールをよけて倒れたので) 地面から立ち上がった

❻ did the pro brush-off: プロらしいしぐさで埃を払った

❼ stood in: (打席で) 構えた

❽ broke a pretty fair curve in by my knees: なかなかいいカーブを膝すれすれに投げてきた。break は p. 152, l. 4 の “He broke one off on Charley, too.” と同じ。

カストロは右投げだ。帽子をかぶり直し、腕をぐるぐる回す。まあせいぜいデカイ面してるがいい。と、奴がふりかぶって、速球を俺の頭のうしろに投げてきた。

まるで三振に打ちとったみたいに、観客は大喜びだった。俺は起き上がって、プロらしく悠然と、ユニフォームの隅々まで埃を払った。そしてふたたび打席に立つと、今度はなかなか切れのいいカーブが膝もとに飛んできて、俺はまたも転倒した。

いったいどうすりゃいい？ わざと当たって出塁するか？ チームのために、祖国のために？ 見事ヒットを打って、生きて球場から出ずに一生を終えるか？ 今度は高目の直球が来て、ええいもう沢山だと俺は開き直り、トマホークみたいに大根切りでファウル。カストロと俺は睨みあう。と、今度はチェンジアップ——おい、こいつどっかのチームでプレーしてたのか？——今度も内角を大きく外れてる、こうなりゃ知るかと思いつを腰で受けた。アンパイアは手で合図して俺を一塁に送り出し、観客はまるでこっちがインチキでもしたみたいに金切り声を上げた。

❾ down I went: I went down

❿ Take one for the team?: チームのために (あえてよけずに) デッドボールを喰らうか？

⓫ Get a hit, and never leave the stadium alive?: ヒットでも打とうものならカストロの支持者たちに殺されかねないと思っている。

⓬ came back with his fastball high: 次に高めの速球を投げてきた

⓭ Enough of this: もうたくさんだ

⓮ tomahawked it foul: トマホークみたいにバットを振ってファウルにした

⓯ had this guy pitched somewhere for somebody?: カストロがチェンジアップなどを投げてきたので、プロ経験があるのかと驚いている。for somebody は「どっかのチームで」という感じ。

⓰ again way inside: またうんと内角に

⓱ Forget it: もういいや、構うもんか

⓲ waved me to first: (デッドボールで) 一塁へ行けと俺に手で示した

<sup>①</sup>You'd see him coming on <sup>②</sup>O'Connell Street — the hanging jaws, <sup>③</sup>the woeful trudge, the load. You'd cross <sup>④</sup>the road to avoid him but he'd have <sup>⑤</sup>spotted you, and <sup>⑥</sup>he would draw you into him. <sup>⑦</sup>The wind would travel up Bedford Row from the <sup>⑧</sup>Shannon to <sup>⑨</sup>take the skin off us and add emphasis to the misery.

<sup>⑩</sup>The main drag was <sup>⑪</sup>the daily parade for his <sup>⑫</sup>morbidity. Limerick, <sup>⑬</sup>in the bone evil of its winter, and here came Con McCarthy, <sup>⑭</sup>haunted-looking, <sup>⑮</sup>in his enormous, suffering overcoat. The way he <sup>⑯</sup>sidled in, with <sup>⑰</sup>the long, pale face, and the <sup>⑱</sup>hot, emotional eyes.

オコネル・ストリートを奴が歩いてくる。垂れたあご、悲しげな足どり、負った重荷。避けようとしてこっちが道の反対側に渡っても、向こうは目ざとく見つけて引っぱり込む。シャノン川からの風がベッドフォード・ローをのぼって来て、皮膚を剥がさんばかりに吹き荒れ、みじめな雰囲気を上乗せする。この大通りは、奴が日々己の病的傾向を見せつける晴れの舞台なのだ。冬のリムリックの骨身に染みる寒さのなか、コン・マッカーシーがやって来る、取り憑かれた顔、巨大でそれ自身苦悩しているみたいなオーバーを着て。にじり寄ってくる歩き方、<sup>うまづら</sup>馬面の青白い顔、感情のこもった熱い目。

① You'd see him coming ...: I'd see him coming ... ではなく You'd ... にすることで、誰もがこの男を日々目にしていた印象が強まる。

② O'Connell Street: 「オコンネル」はアイルランド独立運動の英雄 Daniel O'Connell (1775-1847) にちなみ、オコンネル・ストリートはアイルランド各地に存在する。まずはダブリンの目抜き通りが有名だが、この話は、読み進めていくうちに、ダブリンではなく作者の生まれ育ったリムリックの話であることがわかる。

③ the woeful trudge: 悲しそうなとぼとぼ歩き。trudge は walk の数多い類義語の中でも、いかにも「とぼとぼ」という感じが伝わってくる語。

④ the load: 「その重荷」。何の重荷かはまだわからないが、先回りして言ってしまうと、死者を想うことの重荷。

⑤ spot(ted): ～を目にとめる

⑥ he would draw you into him: これまでは短縮形が使われていて目立たなかったが、この段落、動詞の部分にはすべて would が使われている。ただ一回起きた出来事ではなく、日々くり返し起きていたこと、という感覚が自然に伝わってくる。

⑦ The wind would travel up Bedford Row from the Shannon ...: up は p. 62, l. 10 の "I'd better go up the street" について述べたように、坂をのぼるということではかならずしもない場合も多く、ゆるやかに「中心に向かう」というニュアンスだが、ここは川から吹いてくる風ということで、いくぶん「高さ的に上がってくる感」もある。Bedford Row はリムリックの大通りのひと

つで、シャノン川の川べりから始まってまっすぐ東南に延びている。シャノン川 (the Shannon) はアイルランド最長の川で、リムリックから海に注ぐ。

⑧ take the skin off us: 直訳は「僕たちから皮膚を剥いでいく」。いかにも風が冷たそうである。

⑨ the main drag: the main street

⑩ the daily parade: 日々見せびらかす場

⑪ morbidity: 病的な状態

⑫ in the bone evil of its winter: 少し大げさに訳せば「この街の冬の、骨にまでしみわたる悪の只中で」。要するにひどい寒さのこと。

⑬ haunted-looking: 取り憑かれたように見える。a haunted house といえば「幽霊屋敷」。

⑭ in his enormous, suffering overcoat: むろん外套自体が苦しんでいる (suffering) わけではないが、あたかもそう見えるほど、外套を着ている人間の苦悩がにじみ出ているということ。

⑮ sidle(d) in: (横歩きで) にじり寄って入ってくる。sidled in とあるのは、ll. 3-4 の 'he would draw you into him' と同じで、いかにもこの有難くない人物が、こちらの領域内に侵入してくる感じ。

⑯ the long ... face: 普通 a long face といえば「浮かない顔」の意で、'pull a long face' といった形で使うが、ここでは文字どおり顔が「長い」ということ。p. 184, l. 5 でも 'The long, creased face' という形で出てくる。